

選評

井上大樹

六波羅蜜寺（西光寺）創建期諸像について

本論は六波羅蜜寺に所蔵される本尊十一面観音像、後補の増長天を除く四天王像三軀、薬師如来坐像に焦点を合わせて、造像の背景を考察したものである。言うまでもなく六波羅蜜寺は、平安時代中期の僧空也が建立した西光寺に始まり、空也の没後六波羅蜜寺と改号、天台別院となった名刹である。

本論の最も高く評価される点は、何よりも豊かな独創性に求められる。論者はその造像が仏教結社である知識結により行なわれたことに注目し、檀越として撰削家の参加を想定する。そして空也念仏の理念から、知識と像の性格が死霊の鎮送にあることを明らかにする。特に西光寺の地理的位置と撰削家の時代的狀況から考究して、仁明天皇女御藤原沢子の陵の崇りを鎮める陵寺の機能が期待されていたという指摘は興味深い。すでに持国天像を東寺講堂像の模刻像であるとする説があり、注目を集めてきた。論者はこれに示唆を受けつつ、空海との関係で論じられてきた東寺講堂像について、仁明天皇御願という由緒に改めて注意を向ける。そして空也および四天王像の形制が天台宗と深く結ばれている点から、同じ仁明天皇御願にかかる比叡山定心院の像を原像として推定する。論者の関心は かたち の受容者にも向けられ、そこには仁明天皇への規範意識が存在したと結論づけられる。つまり六波羅蜜寺像は、平安時代彫刻史の正統的な流れの中に位置づけられるとともに、かたちの典拠においても正統性を有することになったのである。

これらの新知見に満ちる本論は、これまでの六波羅蜜寺像観に再考を迫りつつ、研究の進むべき道を明確に指し示している。もちろん多くの推論が含まれるが、様式と文献の上から実証的に論証されており、強い説得力が担保されている。意余って力足らざる点もないではないが、近年の研究動向をも反映する爽快な仏教彫刻論として高く評価されよう。以上、『美術史』論文賞にふさわしい論文として選考された理由である。